

## ■講師



クリストファー・ヒューズ (Christopher HUGHES)

ロンドン スクール・オブ・エコノミクス・アンド・ポリティカルサイエンス (LSE)  
アジアリサーチセンター長

1960年生まれ。1995年にLSE博士課程修了, Ph.D.取得。ダーラム大学政治学部講師, ミドルセックス大学政治歴史学部講師, バーミンガム大学政治・国際関係学部講師を経て, 1998年LSE国際関係学部上級講師。2002年1月より現職。主な研究分野は中国及び東アジアの国際関係。主な著書に*China and the Internet: Politics of the Digital Leap Forward* (共編 Routledge 2003), *Taiwan and Chinese Nationalism: National Identity and Status in International Society* (Routledge 1997) などがある。

●一司会者 おはようございます、愛知大学21世紀COEプログラム国際中国学研究センター、国際シンポジウム「激動する世界と中国——現代中国学の構築に向けて——」第1部、第二日目を開催いたします。それでは早速、特別講演会を始めさせていただきます。最初に本日ご講演頂く、クリストファー・ヒューズ先生のご紹介をさせていただきます。クリストファー・ヒューズ先生は1960年のお生まれで、ロンドン スクール・オブ・エコノミクス・アンド・ポリティカルサイエンス、通称LSEとっておりますけれども、そこでPh.D.を取得されております。その後、ダーラム大学政治歴史学部講師、バーミンガム大学政治国際関係学部講師、1998年からLSEの国際関係学部で上級講師をお勤めになっていらっしゃいます。2002年からは同大学のアジアリサーチセンター長を兼務されております。アジアリサーチセンターと私ども国際中国学研究センターは、今春、現代中国研究の世界的ネットワーク構築を目指して、学術交流協定を締結いたしました。この協定締結にあたりましては、ヒューズ先生にたいへんご尽力をいただいたわけでありまして、同センターとは今後、様々な形での学術交流を予定しております。さて、先生のご専門は中国および東アジアの国際関係でありまして、中国・東アジアに関する著書、論文を多数発表されており、ヨーロッ

パでは新進気鋭の中国・アジア研究者としてたいへん著名な先生でございます。代表的なジャーナルでありますチャイナ・クォーターリー、或いはケンブリッジの国際関係レビューなどの編集委員もしております。今回はたいへんお忙しいスケジュールの中、本シンポジウムのご講演のため、ご無理をお願いしてロンドンからお越しいただきました。特に昨日、成田に着いたわけですが、ご承知のように台風のため、フライト、新幹線が動かないということで、今朝の3時にホテルにお着きになったばかりです。本日は「グローバル時代における中国のナショナリズム」をテーマにご講演いただきます。1時間半位ご講演いただきまして、そのあと質疑応答にしたいと思います。それでは、ヒューズ先生よろしくお祈いします。

●一ヒューズ 山本教授、どうもありがとうございます。日本の旅行は私にとって心躍るものであり、ここにたどり着こうと心に決めていました。と申しますのもこの会議は非常に重要なものであり、テーマも重要であり、LSEと愛知大学にとっても重要であったからです。神が天候にどのような細工をしようともここにたどり着く覚悟を決めていました。さらに、ここへの旅は困難を伴いましたけれども、日本の人々がいかに外国人の訪問客に対して助力を惜しまず、丁重であったかを思い出させてくれます。といいますのは、ここに

る途中私を大いにたすけてくださり、丁重に接してくれたからです。

現在私はここにいます。このことを可能にしてくれたすべての人々にお礼を申し述べたいと思います。勿論、武田学長、加々美、砂山、山本各教授、霞山会関係者の皆様、東海日中貿易センターの原田氏にお礼を申し述べます。さらに多くの中国人の同僚に会えたことは光栄であります。かくも多くの中国人、日本人、西洋人の学界の方を一同に集めたことは大きな業績であり、共同して重要な問題を議論することによって地域の安定と地域の発展に貢献できるものと確信致します。その意味でこの会議はまさに歓迎すべきものです。さらに藤田教授のような旧知の多くの方にお目にかかれたのも喜びとするところであります。私は、愛知大学が中国研究で展開している事業、愛知大学の非常に興味ある歴史、大学の有している特異な地位、特異な資料保存、中国研究を展開している特異な資源などについて関知しております。中国研究を世界的ネットワークで共同研究しようとの構想は極めてすぐれたものがあります。LSEはこれを強力に支援しようと思いますし、私がここに来られたのは大きな喜びとするところです。

さて、会議のテーマであります激動の時代における世界と中国もまたまことに時宜にかなったものであります。激動といったときに思い浮かぶのは、テロへの戦争、非伝統的な安全保障への脅威、世界の唯一の超大国としてのアメリカの地位向上による世界秩序の問題、アジア通貨危機に代表される経済問題、これからの解決が求められている世界経済の構造問題、世界貿易機関のより積極的な貢献、などがあります。技術革新のような他の問題はプラス、マイナスの両面を持っています。それらが状況を改善させるか悪化させるかについては確信をもてませんが、これは我々が止めるわけにはいかず、対処していかなければならないものです。それらは我々が経験してきている変化のいくつかのものです。そしてこれらの変化のすべ

てにおいて中国が主要なプレイヤーとなっています。10年前でも多くの人が驚嘆したであろう指導的役割を中国は果たしております。多分現在では台頭しつつあるパワーではなく、すでに大国であり、さらに世界政治、世界経済の将来に中国は影響を与えつつあります。世界の多くの国が経済発展に遅れを取り、成長率も緩慢であり、時には景気後退に見舞われている中で、中国は確実に世界の経済成長のエンジンとなっています。中国は高成長率を持続しており、世界はそこから恩恵を受けています。中国はそのパワーをますます利用し、国連での重要な役割を増大させ、国際平和維持軍にも参加し始めています。

地域レベルでは、中国は特に東南アジアではASEAN・中国自由貿易協定、北東アジアでは朝鮮半島に関する6カ国協議などにより重要な役割を演じていることは皆さんご承知の通りであります。このように我々は激動の時代に生きており、中国はその変化の形成に重要な役割を果たしております。

今日私は中国の役割の性質について議論したいと思います。中国政治における二つの考え方、コンセプトを調べることによって、それがどのように発展してきたのか、それがどこにいかうとしているのかを議論したいと思います。

まず中国におけるナショナリズムとグローバリゼーションの論議から始めます。論議が意味するのは、中国で起こりつつあるこれら二つの思想を実際に議論することです。中国の学者や政策当局者がこれら二つの思想の関係について語っているところを理解することに私は関心を持っています。

私は中国の雑誌でこれらの重要な用語を調べてみました。これらの二つの思想が議論されている仕方をみたわけです。資料からわかるように、1990年代初頭から現在までをみますと、ナショナリズムに関する議論がますます多くなっています。ナショナリズムの議論は着実に増大して

きており、それは街頭デモや大衆抗議などが表面化してきていることからわかります。しかし見落とされていますのは、グローバリゼーションの議論です。左側の欄をみれば、中国の雑誌でグローバリゼーションがナショナリズムよりもはるかに多く議論されていることに驚きを禁じえません。

我々はこれをどのように説明できるのでしょうか。一つの方法は、これまでに起こっているいくつかの事件をみることです。右側の欄にいくつかの大きな事件を列挙してみました。台湾海峡危機、ベオグラードの中国大使館爆撃、中国のWTO加盟によってナショナリズムの議論が増大しているのがわかります。これらのすべてがナショナリズムの議論を増大させ、刺激していますが、それらはまたグローバリゼーションの議論を一層増大させることにつながっています。特に興味深いのは、グローバリゼーションの議論が1997年頃に非常に多く増大していることです。興味深いのは、それが中国における第15回党大会の年であり、江沢民主席が共産党路線の中でグローバリゼーションを公式に使った時期でありました。そのことが知識人や学者の中でグローバリゼーションの議論を増大させたと思います。それは共産党イデオロギーと政策決定の重要な要素の一つとなっていたわけです。

グローバリゼーションに関するこの論議はいくつかの興味ある問題を提起しています。何が何を決定しているのか。政治がこれを決定しているのか。何らかの方法でこの議論を先導しているのは、政治指導者なのか、エリートなのか、政策決定者なのか。あるいは下からの運動なのか。指導者、エリートを反応させるよう働きかけているのは社会の秩序なのか、多分時々彼らが欲しない仕方での変化なのか。その意味では、グローバリゼーションのプロセスは、政治を政策決定者の手から奪い取り、特定の政策を採用させようと強要しているのか。そして多分、世界の国家がグローバリゼーションに対する何らかの制御を失っているよう

に、彼らもそうなのでしょうか。

もう一つの問いは、グローバリゼーションはナショナリズムの重要性を弱めているかというものです。グローバリゼーションは非常に普及した思想であり、政策当局者にとって非常に重要となっているので、中国ナショナリズムは現在弱まっているのでしょうか。そのグローバリゼーションはナショナリズムの終わりのようなもの、国民国家の終わりのような何かを意味する、多分過去からのものであろうと思われます。もしそうであれば、そのときには多分、自由主義（進歩主義）理論は正しいわけです。それら理論は、グローバリゼーションが世界全体で国家を弱体化させており、文化を同質化させ、世界を西欧化させていると、主張しているものです。それがここで起こっていることなのでしょうか。

私は、これらのどの立場も正しいとは思いません。中国の論議を決定しているのはまだ政治エリートであると思います。それが最初のポイントです。彼らがまだ統御していると私が信じていますのは、第15回共産党大会の時にグローバリゼーションが広範に議論された事実です。このことは、グローバリゼーションを発展させ、考え方、政策に適用する思想とできるとの青信号を与えているのは、政治エリートであることを示しているからです。それゆえ、中国の国家は非常に親グローバリゼーションであり、グローバリゼーションには反対せず、それを先導しようとしています。多分より重要なことは、ヨーロッパの経験に起源を持つ自由主義議論に反対して、我々が中国にみるのは、グローバル化がナショナリズムを一層強化させ、グローバリゼーションが中国ナショナリズムを強化しているということです。つまりグローバリゼーションが中国のナショナリズムを強化する方法が、私が今日探求し、発展させようとするところのものです。

私はいくつかの定義から始めたいと思います。これら定義の目的は、政治学における重要な概念

の多くがヨーロッパ的パースペクティブからきており、それらを中国に適用すれば多くの問題が引き起こされることを示すことです。ナショナリストの原則は、すべての国民国家、すべての国家は、独自の国を有し、国家の単位と政治的単位は同一であるべきだと主張するものです。それは極めて明確であると思います。その政治的起源が1789年のフランス革命にあるかどうかは議論のあるところですが、その普及が工業化によって可能となったことは受け入れることができます。国家は想像上の共同体であるという考えは技術によって可能となったわけです。印刷機のようなものは、非常に古い国家のアイデンティティーを有していると信じている中国、日本のような国にとっては非常に重要な観察記録となっています。ところがヨーロッパにおける考えは、それが真実ではないということです。国家は新しいものであり、近代的なもの、創造され、技術によって可能となったものです。そして、ナショナリズムはヨーロッパで始まり、国家の国際社会の拡大の下でヨーロッパから全世界に植民地主義と帝国主義とともに普及したものであるとのグローバルかつ歴史的見解があります。それは、ナショナリズムがどのように発展し、どのように世界に広がっていったのかのヨーロッパならびにアメリカの見解であります。

グローバリゼーションは非常に問題のある概念です。おそらく最善の定義の一つは、LSEの私の同僚の一人であるデイビッド・ヘルド (David Held) の次のものです。「社会的関係と取引の空間的組織における変容を実現するプロセスあるいは一連のプロセス」。

勿論彼が意味しているのは、通信、貿易、情報の拡大の流れがグローバル社会のあるいはグローバル・コミュニティの発展をもたらし、何らかの方法で国民国家の古いシステムを超えて進んでいくというものです。彼の議論に関する問題の一つは、グローバリゼーションの過程がいつ始まった

かについて彼が明確でないことです。実際冷戦後になってこの問題が学界で論議されるようになったとするのが世界的見解です。我々はグローバリゼーションを20世紀後半に発生したもの、技術革新やWTOの下での世界貿易システムの発展と共に発生したものとする傾向があります。これは、確かにヨーロッパの見方からグローバリゼーションを考えたものです。我々はまた、ナショナリズムとグローバリゼーションの間には緊張があり、民族と国家が最初に存在し、ヨーロッパから成長し、それからグローバリゼーションがやってきて、グローバリゼーションが国家を弱体化させ、侵食し、その生存を脅かす、と想定しがちです。私が以下で議論するのは、中国ではそのようには全然みていないということです。我々が中国でみるのは、グローバリゼーションが最初にきて、ナショナリズムはグローバリゼーションによって作り出されたということ、その意味するところは二つの概念はお互いに競い合うのではなくて、実際お互いを補完しあっているということです。なぜ私がそう考えるのかを説明したいと思います。私は研究の過程で、19世紀後半の中国の改革者である康有為 (Kang Youwei) の中国皇帝への請願書の中で今年あるいは冷戦後の20世紀後半に書かれたであろうと同じ以下の記述に出くわしたからです。「世界は広く8000里ある。中国は50以上もある国の一つである。明末以降からの地球通信の発達、清からの輸送の発達により新しい状況、我々が4000年このかたみたこともない変化が生まれている」。

私は、このような考えが19世紀後半の中国の考えの典型であったと思います。この思想の多くが日本からきていることに皆さんは気づかれています。グローバリゼーションに関する日本の見解と中国の見解の間には極めて興味深い関係があります。おそらく愛知大学は我々の調査プログラムを支援してくれる格好の機関です。

しかしこの引用が示しているのは、19世紀に

における中国のエリートがいかに関係に物事を考えていたかということです。彼らは地球、輸送、通信、生じつつある急速な変化について思いを巡らせていたわけです。彼らは世界的な軍事活動、同盟、外交のようなプロセスに対峙していたわけです。中国のある地域、条約港、上海のような場所での通信は比較的進んでおり、エリートは地球的思考、貿易、文化に直面していましたし、その当時には工業化は新しくなかったわけです。勿論、このような状況は今日と比べるとはるかに規模の小さいものでありました。しかし条約港のような地域では極めて強烈であったわけです。例えば、19世紀後半から20世紀初頭に至る上海と世界との取引、貿易、接触の比較、往来する外国人の今日の上海との比較を行うことは非常に興味深いと思われます。上海が当時いかにグローバル化していたかがわかります。勿論、上海、香港、その他の条約港は中国人の世界システムの見方に非常に重要な影響を与えた場所でありました。それは、彼らを地球的思考で政治を議論させ、国内問題を地球的問題として考えさせるに十分であったわけです。それは重要な進展であります。

それは社会学者が「グローカリゼーション」と呼ぶところのものです。私は、グローカリゼーションという用語が日本、それも西洋の事物を国内市場にアピールする必要から日本の広告業者の造語によるものと信じています。我々、社会学者にとってグローカリゼーションは興味ある用語です。なぜなら、それは国家間の取引、地球上の取引がどのように国内のアイデンティティを強化するかを、さらに我々はサミュエル・ハンチントンの文明の衝突、文化の衝突について必ずしもいつも語る必要がないことを思い起こさせてくれる何かであるからです。そのように話すことは、文化がどのように交錯するか、つまり文化が地球規模でやってくる時、それらは国内のアイデンティティを実際増大させ、強化することを誤解することになるわけです。それは、国内の文化、国内

の問題、例えば宗教、世界宗教としての儒教あるいはカトリック教について考えるときにも起こります。それが地球規模で、他の宗教もあると理解するときには、世界宗教であるとのあなたの主張について考え直さなければならなくなります。競争があり、他の真実を否定しても多様性の存在は少なくとも認めて、世界宗教についてなお考えたいとするときには、別の仕方考えなければならぬわけです。

この問題は複雑なので、これ以上立ち入りません。グローバリゼーションに関する中国の思考が19世紀にいかに精緻化された、複雑なものであったかを示したかっただけです。そしてこの議論にとって重要なのは、この思考が中国におけるナショナリズムの台頭よりも早かったことです。民族 (minzu) という用語は1899年ごろ中国の改革者梁啓超 (Liang Qichao) によって日本から中国に紹介されました。おそらく彼が最初にこの用語を紹介した人物と考えられます。彼は民族主義 (minzu zhuyi) という用語を最初に使用しました。これは康有為がグローバリゼーションについて語った後です。最初の国民党、孫逸仙 (Sun Yatsen) の興中會 (Xingzhonghui) は1895年に設立されました。どこで設立されたのか。ホノルルです。誰によって設立されたのか。グローバルなビジネス人である孫逸仙が香港での西洋化に出会い、中国大使館によって投獄されたロンドンでの滞在を通じての経験によるものであったわけです。彼は西洋医学にも通じていました。これは初期の中国民族主義者の非常にグローバルな見地を示しています。それらはグローバリゼーションの文脈の中で形成されたわけです。

私がこれまで議論してきたことは、中国においてグローバリゼーションに関する思考がすでに発展しつつあったときに、中国のナショナリズムは発展し始めたということです。それではどのようにして中国人は、グローバリゼーションを包含し、協調するある種のナショナリズムを創出すること

ができたのでしょうか。この背後にある中心的な考え方は、特に中国のアイデンティティを保持するために外国の学問、外国の技術をどのように使用するかという考え方であると思います。張之洞 (Zhang Zhidong) が1898年の勸學篇 (Quanxuepian) において提案した體用二分法 (ti-yong) は中国の学問 (中学) を本質、西洋の学問 (西学) を「機能」(用) として捉えています。そしてこれはナショナリズムが発達したときには、すでに生じていたところのものであったわけではありません。事実、ナショナリストの政党とイデオロギーを打ち立てる全体のポイントは、この二分法をさらに発展させることでありました。つまり世界の技術的学問が中国の本質と中国のアイデンティティを強化するためにどのように利用できるかというものです。

ナショナリズムはもともとグローバル化プロセスへの反応として発達してきたもので、1990年代において中国のナショナリズムの強化がみられたのは驚くに当たりません。1990年代に多くの外国の観察者が中国のナショナリズムの強化をみたときにショックを受けたことを私は覚えています。多くの人々は中国政治の要素として中国のナショナリズムを完全に見落としていました。それは「ノーと言える中国」の出版、1995-6年の台湾海峡危機、1999年のベオグラードの中国大使館の爆撃後の大衆デモによって実際目に見えるものとなりました。そのときになって始めて、「中国のナショナリズムは中国政治文化の非常に重要な要素である」と中国の観察者は語ったわけです。たびたびあることですが、学界も最も重要なものを見落としていましたし、それからそれらを理解するように走らなければなりません。中国のナショナリズムのこの台頭を理解しようとした多くの人々は基本的な間違いを犯しています。なぜなら私が話しているところのもの、すなわちナショナリズムの初期の発展をグローバリゼーションへの反応として捉えていないからです。ナショ

ナリズムがもともとグローバリゼーションへの反応として発展したことが正しければ、そのときには勿論、グローバリゼーションが強化されれば中国ナショナリズムも強化されることとなります。特に政治的エリートがナショナリズムとグローバリゼーションの概念を、国家を強化するために、この会議のテーマである世界的変化の時代における国家を合法化するために、どのように使用するかという政治力学を確立することは非常に重要であります。多くの方法によって彼らはこれに成功してきています。

これは極めて注目すべきことです。なぜなら體用という考え、つまり外国の学問を利用することによって中国の本質を保持しようとする考えは、しばしば非論理的であり、合理性を持たないと思われたからです。こういうことは起こりえない、もし外国の学問や技術を採用しようとするれば、そのときには民族のアイデンティティも変えなければならない、多くの人がそう議論しました。20世紀初頭の多くの人々、多くの西洋の観察者は、西洋の技術と技術的学問の採用によって中国の西欧化がもたらされると語りました。代わりに我々がみたのは非常に異なったものであり、我々はこれを毛沢東 (Mao Zedong) の共産主義の時期に農民をマルクス理論の中心においたマルクス主義の意義や、マルクス主義に対して多くの中国の伝統的政治的概念を導入したことにみることができます。鄧小平 (Deng Xiaoping) は、社会主義市場経済を導入するとともに中国のナショナリズムを復活させ、国家アイデンティティの文化的本質に対する国家・イデオロギーの支配を強化しました。そして最終的に1989年以後、江沢民 (Jiang Zemin) は、鄧小平政策の継続であった国家愛国主義教育運動によって党の合法性を強化したわけです。一方、上海に行きそこでの目覚ましい技術発展を観察すればわかるように、大量の外国投資と外国技術が受け入れられています。同時に海外からの「精神的汚染」と「ブルジョアの自由化」を

抑える努力も行われているのです。そしてふたたび多くの観察者は、これは機能しない、長続きせず、統御できなくなるだろうと語りました。これまで国家は統御を失っていません。中国が世界で果たしている顕著な役割は、中国の本質を強化するために西洋の学問を利用する體用二分法が機能しており、多分それほどそれが非論理的ではないことを示しているといえます。

江沢民が第16回共産党大会で多極化とグローバリゼーションについて次のように語っているのにそれをみることができます。「政治的多極化と経済的グローバリゼーションへの趨勢は、ジグザグを繰り返しながら進展している。科学・技術は急速に進展しており、全体の国家勢力における競争は激しさを増している。このような緊迫した状況の中で我々は前進しなければ後退することになる」。

我々は上の声明の中で次のことを読み取ることができます。経済はグローバル化しており、すなわち経済のグローバリゼーション、政治は多極化しており、すなわち政治の多極化がみられます。江沢民によれば、二つはともに手を携え、相互に補強合っています。彼が指摘している他の重要な問題は科学・技術であり、国際権力の鍵となっています。これが、鄧小平が明確に認識し、江沢民が進めようとした何ものか、科学・技術が国家生存の進化闘争における成功の鍵として採用されるべきだとする信念であります。江沢民からの長い引用をお許し願いたいですが、それらは現在の指導体制における思考の均衡を明確に示しており、胡錦濤 (Hu Jintao) もこれを踏襲しています。これについては後で議論します。グローバリゼーションとナショナリズムのこの均衡は江沢民の党大会への次の報告に示されています。「わが党は時代の前線に強く立ち、三つの主要な歴史的課題を遂行する上ですべての民族グループの中国人民を団結させ、先導しなければならない。近代化を推進すること、世界平和を守り共通の発展を促進

するために国家の再統一を達成すること、中国の特性を有する社会主義への道に中国人民の偉大な若返りをもたらすこと」。

ここで中国指導者の枢要な考え方のどのくらいが19世紀末にまで遡ることができるのでしょうか。当指導部の三つの課題は近代化、国家統一・世界平和、中国の特性を有する社会主義への道に至る中国の偉大なる若返りです。中国を強化するために外国技術を使用するという二分法が残存していることが説明される必要があります。儒教をナショナリズム・共産主義に変容させる最も重要かつ歴史的分析を行った「儒教中国とその近代的運命」において、ジョセフ・レベンソン (Joseph Levenson) は清王朝の改革者が不可能なことを企てようとした方法を綿密に調べています。彼らは外国学問の採用と儒教を和解させようとしませんでした。彼らは成功しなかった、とレベンソンは言っています。対象の機能とその本質を分離することはできない、西洋科学・技術を西洋文化の本質を輸入することなしには輸入できない、それはレベンソンが1956年に議論したところのものです。

現在では多分、論理的には対象の機能をその本質やアイデンティティーから分離させることはおかしい、というレベンソンは哲学的には正しかったといえます。19世紀後半、20世紀初頭には多くの中国人もこのように論じました。しかしながら、社会学的には納得できます。政治においては論理的である必要はないわけです。事実論理的であることは不利になります。哲学者は論理的ですが、政策を正当化する必要はありませんし、大衆を動員する必要もありませんし、国家を合法化する必要もありません。政治的論議の要素が人民を動員する上で論理的であるのはそれほど重要ではありません。中国のアイデンティティーを強化するために西洋、外国の学問を使うという康有為の二分法について見落とされているのは、大衆を動員する能力であります。言い換えれば、保守主義者とみなされがちな張之洞のような後代の儒教改

革者の革命的要素は十分に研究されていないということです。これらの中心をなしているのは、江沢民の第16回党大会への報告にみるように現在まで残っているナショナリスト、グローバリストの論議の特定の要素であります。これらの要素の一つは文化的、イデオロギーの正統性を人生の案内としてではなくて、忠誠の対象とする能力です。このことを簡単に説明します。儒教、あるいはマルクス主義、あるいは中国の特性を有する社会主義の論理的内容はそれほど重要ではありません。重要なのは、それが中国の固有性の象徴として表されることです。19世紀後半までに儒教は社会を組織する法規であることをすでに停止していました。儒教改革者が行ったことは、儒教を取り入れ、それを政策決定と分離することでした。しかし儒教は依然として国家アイデンティティーの象徴として重要な役割を果たしていました。儀式を持たなければならなかったし、儒教への愛を示す式典を持たなければならなかったわけです。しかし政策決定になりますと、その過程から外さなければならなかったのです。

なぜこのアイデンティティーを維持するのでしょうか。もともとは儒教でありましたが、それから中国風マルクス主義、それから中国の特性を有する社会主義となったわけです。なぜそれを保持するのか、忠誠の象徴が必要なために、危険に瀕したときにおいて、あるいは脅迫下で提示されることになりました。近代政治、大衆政治、大衆動員の政治の鍵要素は、中国の固有性の象徴が外国によって脅かされるということです。

このパースペクティブからすれば、19世紀後半の改革者や特に張之洞の勸学を分析するとき人々が見落としているのは、国恥 (guochi) の感情を鼓舞する必要について触れることです。国家の背後で大衆を動員する政治の鍵テーマとして国恥の使用が19世紀にはしばしば、そして現在に至るまで行われています。国の考え方とそれをあらかず何らかの象徴があれば、国恥の考えをもつ

ことができます。これらはどこからきたのか、それはヨーロッパのナショナリズムからではありません。それは意味を成さないわけです。それは中国の伝統からこなければならなりません。張之洞自身勸学の中でこの点について明確にしています。19世紀後半、20世紀初頭の著作の殆どにおいて、彼らは彼の書物である中庸 (Zhongyong) 原理から引用され、この資料に要約されている儒教の要素を使用しています。それが意味しているのは、国恥を知れば、英雄か強力になれるというものです。これが孔子です。それは19世紀ヨーロッパのナショナリズムではなく、グローバリゼーションへの反応として使用されています。魯の哀公による施政のあり方についての問いに孔子は次のように答えています。「恥を知ることは勇気の要ることである」これは19世紀改革者にとっては非常に有益でありました。大衆に中国人であることの意味、それが辱められるということを教育することによって、強くなり、ナショナリストになることができるわけです。

張之洞のような思想家にみるものが大衆を動員する方法としてアイデンティティー、民族のアイデンティティーへの脅威をみる上で重要なステップになっています。そしてそれがグローバリゼーションへの反応として中国における実際のナショナリスト政治に対する可能性を開くものであります。これが初期のナショナリストが語っている力学です。

孫文はお手本です。日本から多くのものを学び、日本で多くの時間を過ごし、多くの支援を得ました。彼は中国ナショナリズムの父とみなされています。彼はナショナリズムをどのように考えたのでしょうか。それはロマンチックな考えではなく、イデオロギーでありました。彼はいつにいつ、イデオロギーとは何か。イデオロギーは一種の思想、一種の信念、一種の力、一種の権力です。

冷戦後のみに現れた一種の政治的資源としてのナショナリズムの使用を見落とすことは、勿論基

本的に間違いです。それは事実近代中国政治文化にとって中心であります。それは勿論、政治的エリートはナショナリズム、国づくり、国恥の考え方に関心を持っていることを意味します。それゆえそれらは、国家を正当化する政治的資源を構築し、現在まで引き継いでいられます。前に触れたように、1989年の愛国教育運動にみられるわけです。後の1990年代には台湾、ユーゴのベルグラードの外交危機でそれがみられました。人々がナショナリストの復活を分析するときには、歴史的な文脈を心に刻んでおくことが重要であります。

これがうまくいかないとみるのは西洋の学者だけでなく、中国人の学者もこの歴史的な文脈を見落としているようです。1990年代のナショナリストの復興について識者の多くは、それはアメリカの台湾に対する政策への反応であるとみる傾向があり、国内の力学については殆ど語らないし、これが国家や共産党によってどれだけいつも奨励されていたかを語ろうとしません。二分法の一つ、アメリカの政策だけをみることはできません。中国で理解され、解釈されているやり方、そのようなやり方は教育システム、文化産業やその他に大いに依存しているわけです。

エリート政策と世論の関係を理解するためには、ナショナリズムが政治資源として1世紀以上の間政治的エリートによって奨励されてきたことを理解することが重要です。しかしこのことは、エリートを逆説的な位置に置くこととなります。一方では彼等自身が奨励してきた大衆ナショナリズムをアピールし続けなければなりません。しかし同時に中国の台頭を平和的なもの、自分たちの国がなんらの脅威を与えない、平和的に台頭している国であるということを提示しなければなりません。

さて1990年代の出来事は、同時にこれらの二つを行うことがいかに困難であることを示しています。ノーといえる書籍の出版、中国の都市におけるデモは、一方でナショナリズムを奨励し、他方

で中国を何の脅威もない安定的な勢力として台頭していると自らを提示することにおいて、エリートを困難な立場に陥れています。

彼らが均衡をうまくとれるかどうかは、中国の役割が将来発展していく道程への重要な含意を有しています。地域政治においては、特に勿論日本との関係においては非常に明瞭です。これは勿論歴史的な問題が付きまとい、中国ナショナリズムの形成における鍵要素の一つであります。中国の政治的エリートがナショナリズムを発展させる方法、例えば教育制度、教科書を通じて日本のイメージを発展させる方法にみられます。日本が中国のイメージを発展させるのと同じ方法が中国においても重要であり、両サイドにおける問題です。私自身日本についてどのようなイメージが奨励されているかをみるために中国の教科書を調べてみました。全体としていえることは否定的なものです。児童が日本を現在の状況でみることを奨励していません。中国の強いナショナリズムの感情を植えつけるために過去からのトラウマの多くを使用しており、それは将来の日中関係の助けにはなりません。

最近では韓国にもみられるように、韓国人が高句麗問題、すなわち中国人が歴史的に北東中国をどう記述するかの問題について怒りを表しているように、ナショナリズムの問題が国際関係を複雑化させています。そしてこのことは、エリートによるナショナリズムの利用が中国だけでなく、勿論グローバル化への反応として同じようなナショナリズムの発展をみることが出来る韓国においても根深い問題を作り出していることを示しています。これは国、国家、民族間の良好な関係を脅かす現実の問題です。勿論短期において我々が直面している最も危険な問題は、ここでは詳しく触れない台湾問題です。これについては後で詳しく論じるべきであります。アジア太平洋地域の二つの大きな安全保障への脅威の一つを提起しているものです。それは勿論ナショナリズムと

ナショナリストの政治に起源を持っており、その解決はナショナリズムのどこかになければならないものです。

討論の時間を持ちたいので、ここで結論に入らせていただきます。会議のテーマに戻りますと、世界は確実に激動の時期を通過しています。これについては疑いをさしはさむ余地がありません。天候もこの2日間荒れまくっています。しかしこの激動は、19世紀、20世紀半ばの人々が直面した変化よりも劇的なものでしょうか。私はそうは思いません。世界政治、世界経済における当時の深化した構造的変化、冷戦後に起こったものは、より破壊的なものでした。しかし私が今日論じてきたものは、中国が今日の変化に政治的に反応してきている方法の多くが、19世紀後半、20世紀初頭・半ばの激動前の時期によって決定されてきているということです。

さてグローバルな変化やプロセスへの反応によって作り出されている中国政治の中心的力学は、ナショナリズム、愛国主義的な活動です。グローバル化のプロセスは新しいものではなく、アジアの人々は、グローバリゼーションが新しいものとする傾向のあるヨーロッパ人よりもこのことに気づいていると思います。世界のこの地域の国民国家や国家は帝国主義と呼ばれるグローバル化のプロセスによって形成されてきました。

1990年代はこれらのプロセスの加速化をみました。すなわち、金融の規制緩和、貿易自由化、技術革命です。これらのすべてがグローバル・プロセスを加速化させました。しかしながら、グローバリゼーションの加速がナショナリズムの終焉を意味するとの自由主義的考えは勿論根本的に誤りです。例えば、我々はインターネット上の動きをみる必要があります。私もこの分野で少し調査してみました。情報化のプロセスが自由化、民主化、西洋化を必ずしももたらさず、代わりに情報化革命で我々がみるものは、むしろ既存の政治的文化の強化です。この技術革命はナショナリズムを強

化しています。しかしながら、冷戦終結後の中国ナショナリズムの議論の多くは、アメリカや日本に対する反動であると誤解されています。それらは勿論重要な要素であり、民族主義的復興がアメリカの政策によって引き起こされたことは一部事実であり、それは昨日議論されたと思います。日本政府が取っている手段のいくつかもまた、緊張の増大と中国ナショナリズムの強化をもたらしています。しかしそれらの外国政策の問題よりもより重要なのはもっと根深いところにある力学です。これらは、政治的エリートが世論を動員し、党と国家を正統化するため、変化の結果もたらされた一般人民の不安感を利用したやり方です。これはエリートの正統性を高める効果的方法であり、党指導部において異端者や異なる政治派閥といった反対者を葬るために時々これまで使われています。ナショナリズムは敵を陥れるための非常に強力な道具として使われているわけです。

ところで、胡錦濤 (Hu Jintao)、温家宝 (Wen Jiabao) の下での現在の指導部は、ナショナリズムを政治的資源として利用したがないようにみえます。代わりにより平等主義、中国の西部と東部、その他との開発をバランスさせる均衡的な国家開発をアピールしているようにみえます。それは勿論歓迎すべきことです。しかし、もしこの政策が失敗し経済問題が悪化すれば、その時には中国政治文化の長期に確立された力学は、指導部にとってナショナリズムに訴える以外にその政治的正統性を高める資源がないということを示しています。

通信、経済統合、グローバルな安全保障のようなグローバル・プロセスが中国における愛国主義的政治の力学を弱体化させるよりもむしろ強化させる傾向があります。

私が今日ここで議論してきたことは、これを歴史的にみる必要があること、ナショナリズムとグローバリゼーションの関係についてはなんらの神秘性もないこと、中国のナショナリズムの誕生は

まずグローバル化プロセスへの反応であったことを理解することです。

私の話はこれで終わりにしたいと思います。質疑応答の時間があるものと信じています。

●—**司会者** どうもありがとうございました。先生のほうで質疑応答の時間をとりたいということで、ちょっと早めに講演のほうを終わっていただきました。それでは十分に時間がありますのでこれから質疑応答に入ります。発言される方は最初に所属とお名前をいってから発言していただきたいと思います。どなたかご質問の方、いらっしゃいますでしょうか？ はい、どうぞ。

●—**質問者** 私は東海日中関係学会の会員の林でございます。今、地球の裏側からみた中国の現状について先生のお話がありましたけれど、1955年のバンドン会議当時の中国の総理大臣周恩来が中国は永久に力の外交はとらないと、言明されていきました。そして先ほど先生のお話にありましたけれど、東南アジアへの影響力と、バンドン会議以降の中国をみれば、中国権力機構、権力闘争の場では、結局保守派と改革派の血みどろの歴史もありました。力の外交であるナショナリズムとグローバルイズムと、こういうお話の解明もございました。現時点で、独断と偏見でみれば、昔の中華帝国、東夷、西戎、北狄、南蛮と、まあこれの再来を、一面で危惧する面もあるんです。単に東南アジアの影響力といっても無視できないものがあると、そんな考えをもっています。先生のご回答を願います。

●—**ヒューズ** 非常に面白い質問ありがとうございます。1955年のバンドン会議では非同盟政策、覇権の役割を果たさないといいましたが、これが東南アジアにおける現在の政策でどう変わったかということですが。ある人たちは東南アジアにおける中国の政策を儒教的世界秩序、中国中心の世界秩序の復活とみています。東南アジアに行きますと、人々は中国のパワーの台頭に懸念を抱いています。私自身は、それを中国帝国の復活あ

るいは中国中心秩序の復活とはみていません。なぜならそれは東南アジア諸国におけるある意味では主権の終わりを含意しているからです。私は中国人がそれを欲しているとは思いません。代わりに、東南アジアを新しい形の外交、新しい形の経済活動、例えば高いリスクなしに自由貿易協定を実験できる格好の地域としてみています。このことが北東アジアでできないことは明らかです。しかし東南アジアは、若干の懸念はありますがアメリカからの即座の反対がない異なる地域です。しかしインドとの緊張の高まりがあり、バンドンの問題より重要です。なぜなら、インドはもう一つの台頭しているパワーであり、東南アジアへの関心を持っています。さらにインド洋、その他へのアクセスに関する海洋上の問題があります。

さて私は国際関係においては現実主義者である傾向があります。これらの発展を国家間の安全保障のディレンマから理解することを信じています。つまり、一国が強くなりますと、それは他の国家から脅威とみられ、それゆえ他の国家は力を増大させ、防衛し、軍備競争に走り、戦略的不確実性、危機がもたらされるということです。これが東南アジアで起こっていることだと思います。私は、中国人がある種の中国世界秩序、中国中心秩序、あるいは地域のリーダーであることを唱導しようとしているとは思いません。しかし彼らは、力の現実、ビルマにおけるインドの力の現実、北東アジアにおける日本・アメリカの力の現実によってこの状況に組み込まれています。北東アジアにおける北朝鮮の危機、中国を最も悩ませているのは核危機ではなくて、難民危機です。これらの問題すべてが、中国がより積極的な役割を果たさなければならないことを要求しています。中国がより積極的な役割を果たすとき、人々は、中国が中国世界秩序、中国中心システムに戻りつつあるというわけです。それは将来起こるかもしれません。将来には何事も起こります。現在の声明とか政策をみると、中国は脅威とみられずにより中

心的役割を探る必要があるということを慎重に  
いっていることに気づきます。それは日本にもあ  
てはまり、日本にとっても同様の問題です。

そこで問題は、中国が近隣諸国、特に東南ア  
シアにおける懸念を緩和するために鍵政策のいくつ  
かを実際に変更するかどうかです。この地域では  
南シナ海の懸案である台湾問題があり、最近では  
シンガポール首相の台湾訪問に対する北京の怒り  
の反応が指摘されます。これらのすべては、近隣  
諸国が中国をなかなか信用できないこと、中国の  
台頭するパワーが地域安全保障への脅威となっ  
ていることを示しています。もし中国が、日本が特  
に ASEAN フォーラムで推進している、南シナ海  
のような問題を話し合うアジェンダを受け入れな  
ければ、多くの人は誤解し、中国の GDP の成長  
は中国の世界秩序と中国中心システムの復帰を意  
味すると写るでしょう。それが彼らの欲している  
ところではないことを人々に確信させるのは中国  
指導部いかによります。人々を確信させたいな  
ら、最も重要な問題である尖閣諸島や台湾、南シ  
ナ海をめぐる紛争について国際組織、地域機関で  
話し合わなければなりません。北朝鮮問題につ  
いては 6 カ国協議での何らかの進展があること、  
ASEAN フォーラムでの東南アジアにおいてもこ  
れを待ち望んでいます。人々はまた東南アジアで  
の人権問題についても注意深く見守っています。  
そこでは中国の政策は日本、ヨーロッパ、アメリ  
カとは非常に異なるものがあります。中国のパ  
ワーの台頭が脅威ではないと人々を確信させるに  
はまだまだ長い道のりがかかりますが、究極には  
中国はこれらの鍵課題については、結局挑戦を続  
けなければなりません。

●—楊棟梁 中国南開大学日本研究院の楊棟梁で  
す。先ほど先生のご報告を拝聴し、まず非常に素  
晴らしかったと感じました。私はイギリスにこん  
なにもずば抜けて中国問題を理解しておられる専  
門家がいることに驚きを感じ、非常に感心してお  
ります。更にこの報告そのものがグローバリゼー

ションと中国のナショナリズムの問題に言及して  
おりますが、このタイトル自体が非常に有意義で  
あり、我々中国の研究者も今後まじめに考え研究  
すべき課題であります。そして私が先生にお聞き  
したいいくつかの問題もまた学術的な問題であり  
ます。最初に、先生は歴史的な角度から中国のナ  
ショナリズムの 100 数年にわたる発展の状況を述  
べられ、それは先ほどの報告の中でも触れられて  
いました。先生の見解をお聞きしたいというのが  
私の一つ目の質問ですが、先生のグローバリゼー  
ションというこの言葉自体の定義に対する基本的  
な見解はどのようなものなのか、それが一つ目の  
質問です。この問題について経済学には経済学の  
解釈があつて、一般的に情報化時代の到来に伴い  
現れた社会現象であると考えられています。歴史  
学と制度学派にはまた別の解釈があります。先生  
がおっしゃられているのは後者の方かもしれませ  
んが、この点について先生のご意見を賜りたいと  
思います。二つ目の質問は、歴史的な角度から中  
国のナショナリズムの問題を見るとすれば、先生  
の先ほどのご発言をお聞きしたところ、先生は中  
国近代以降のナショナリズムの発展過程をよく  
知っていらっしゃると思います。つまり中国は近  
代以降、正確に言えばアヘン戦争以降、ナショナ  
リズムが確実に高揚しているのです。もしこのよ  
うな高揚がなければ、現在の中国はありませんし、  
とっくに滅亡していたでしょう。ならば現代の中  
国に現れたナショナリズムというこの現象と中国  
の近代以降歴史上何度も、例えば五四運動や抗日  
戦争時期あるいは日中戦争時期などに高まったナ  
ショナリズム、現在のこのようなナショナリズム  
と歴史上何度か起こったナショナリズムの高まり  
を比べて、その性質や規模について、もう少し詳  
しく、例えばその強弱などを紹介していただけま  
せんか。私の質問はこの二点です。

●—ヒューズ ありがとうございます。グローバ  
リゼーションの定義に対する質問ですが、定義に  
は常に問題が付きまっています。言葉は歴史と

ともに変化し、常に新しい意味が与えられ、異なる仕方でも使われているためにいかなる定義も十分ではありません。私が出会った最良の定義は同僚のデイビッド・ヘルドのものでありまして、不満足で十分ではありませんが、経済的なもの以上のものが含まれています。中国の指導部は、グローバリゼーションを経済的現象のグローバリゼーションとみようとしており、その政治的、文化的含意を議論しようとはしていないと私は思っています。私が今日議論しようとしてきたのはこれが可能かどうかということです。

さて多分それは可能だというのが私の結論です。なぜならそれは長い時間をかけて進んでおり、経済グローバリゼーションについて語ることはできるし、同時に政治的、文化的に国民国家を構築できるからです。勿論物事は変化しないということの意味しているわけではなく、中国のアイデンティティーは変化していますし、その政治も変化しています。しかしそれが西洋化を意味しないことは確かです。しかし確かに我々はすべての取引について語る必要があり、事実西洋の学問の業績では、グローバリゼーションはもともと人類学者が使用した用語であり、経済学からきたものではなかったわけです。それは、宗教が世界的規模で交錯しているのをみた人々によって使われたもので、1970年代にまで遡ることができます。しかし誰も人類学者には関心を示しませんでした。勿論冷戦の終結とともに人々は技術や金融緩和、西洋化、人権、国際標準、文明の衝突について語り始めました。だからグローバリゼーションは単に経済的プロセスではなく、文化面でも捉えられなければならないのです。しかしそのことは文化が一つのグローバル・システムになるということの意味しているのではなく、それは私がいおうとしていることではありません。経済的グローバリゼーションがあり、文化的グローバリゼーションもあるということは、なんら対立したり矛盾したりするものではなく、ナショナリズムを持ちうる

のです。なぜならグローバリゼーションが文化的グローバリゼーションから出てきており、それが鍵であるからです。

ナショナリズムが中国におけるアヘン戦争後に出てきたということには私は同意しません。これは非常に重要なポイントであると思います。ナショナリズムが中国で使われなかった時期がアヘン戦争と19世紀末の間にありました。それは、日本が民族論 (minzu-lun) を使い始めた明治維新後日本からきたものであり、人々がナショナリズムについて語り始める前の19世紀末ごろまでにまだかなりの時間がありました。しかしそれ以前には、彼らは何について語っていたのでしょうか。彼らは沈黙していたわけではなく、グローバリゼーションについて語っていました。しかしグローバリゼーションという用語は使われなかったのです。彼らが使ったのは *diqu* (地球) であり、彼らが語ったプロセスは我々が現在経済、文化的取引、外交などについて語っているまさにプロセスであり、これらのプロセスの中でいかに中国の文化を保持するかということでありました。だからナショナリズムがアヘン戦争から始まったということには注意が必要であると思います。それは勿論我々がどう定義するかによりますが、ナショナリズムを自覚的イデオロギーとして民族主義 (minzu zhuyi) と呼ぶのは19世紀末になってからです。その点では1895年の日清戦争がアヘン戦争よりも重要でした。なぜならそれは中国のアジアにおける実質的な終わりを意味していたからです。脅威だったのはアヘン戦争ではなくて、日本への敗北がはるかにショックであったと思います。それは中国の世界秩序の実質的な終わりを意味したからです。なぜなら、日本がそのヒエラルキーに加わらなかったならば、もはや誰もそれを信用しないことになるからです。それは私がイギリス人であり、アヘン戦争の責任を逃れようとしているものではありません。アヘン戦争は勿論犯罪であり、個人的には大いに恥じている歴史的

犯罪です。アヘン戦争のショックが中国のナショナリズムに転換するには、歴史的にかなりの時間を要したと思います。アヘン戦争と1895年あるいは1899年間のどこかでグローバリゼーションとナショナリズムの2つのプロセスがどう交錯し相互を強化させたかが鍵です。私はその時期の専門家ではないし、その答えを知っていると主張するものではありません。しかしそれは現在の論議を理解しようとするれば理解する必要があるところのものであります。

私の結論と先の質問への答えとして、この多くは、中国の指導部が経済発展、政治的表現に基づき新しい正統性をどう発展させるかによるだろうし、そのときにはナショナリズムをそれほど必要としなくなるでしょう。勿論先の質問に答えて議論した外国政策課題があります。さらに地勢上の現実、大国間地域間の競争、これらすべてが中国のナショナリズムをより際立たせ、表面化させ、近隣諸国からの中国への脅威を増大させています。このことが起こらないように努力し、これを回避しうる多くの方法があると思います。前に言及しましたように、最も重要なことは中国指導部の政策とその正統性の発展であり、他のこともあります。教育制度、人々が国民のアイデンティティーと他の人々に対する理解について学校で教えられることもあります。中国が近隣諸国を安心させる方向、つまり良好な近隣政策は歓迎されるし、望ましい展開ではありますが、まだ限られており、これには中国指導部のより基本的な妥協が必要であろうと思います。これらの妥協のすべてが国内の中国ナショナリズムによって阻止されるかもしれません。そうなれば問題です。そのため中国指導部や国家が若い世代に異なる種類の政治的文化を教えること、またナショナリズムが正統性の源泉として重要ではないという異なる政治の方向に向かうことが重要です。それができなければ、基本的な力学は変化しないし、それは指導部にとって問題になるでしょう。なぜなら、中国指導

部が国際平和の状況を望んでいるというときには、不安定を引き起こすことなく経済発展を続けたいと本当に考えていると、私は確信しているからです。しかし中国の近隣や地域の役割に関する主要な問題のいくつかについて指導部が常に妥協するならば、人々が不平を持ち始め、デモを行うなどすればそれは難しいかもしれません。それは妥協をもっと困難にします。そのような政治から遠ざかるうとしているのが指導部の関心であります。

●一司会者 はい、先ほど同時に何人かの方の手が挙がっておりますので、前席と後席で交互に質問を受け付けたいと思います。先ほど前席から受け付けましたので、後席のほうで質問のある方、挙手を……ではまず、そちらの上の方。

●一郝時遠 中国社会科学院から来た郝時遠と申します。このような報告を聞くことができ非常に嬉しく思います。時間を省くため、あまり感想を述べることはしません。私の質問は三点です。一つ目は、先生は中国の初期のグローバリゼーションについて、康有為の話を挙げて証明されましたが、私が康有為のこの話について理解していることから言えば、決して中国初期のグローバリゼーションの観念を表していません。中国の伝統的な観念は「天下」観、「中心」観であり、まったく世界を知りません。近代になって初めて、中国は、地球は八千万里あり、中国はその一つである、列国は五十あり、中国はその一つであるということを知ったのです。彼は世界にこんなにも多くの国家があることを知ったため、当時『上清帝書』ひいては全維新派のこのような改革の、その目標はすべて中国の民族国家、nation-stateを打ち立てることでした。けっして最初にグローバリゼーションの観念が発生したのではなく、むしろナショナリズムが発生したのです。まさしく彼はこの世界は中国という一つの世界だけではないということを知ったがゆえに、我々も西洋のモデルに基づき一民族国家を打ち立てなければならない

というこのような一つの観念を持ったのです。その事実はこのように理解するべきだと思います。ならば先生の理解に基づけば、私の質問はつまり、これ以前に、西洋人はすでにもっと早い時期に「グローバル」という観念があった、例えばコロンビアの新大陸発見、例えばマゼランの世界一周航海などが挙げられますが、ならばこのグローバルという観念、中国民族のこのような国家観念は西洋初期の一方的なグローバリゼーションの抑圧のもと生まれたと言うべきなのではないでしょうか。これが一つ目の質問です。二つ目の質問は、それならば目下このようなグローバリゼーションの時代に、民族国家は、すべての国家を含めて、まだナショナリズムが必要なかどうか、もし必要ならばなぜなのか。三つ目の質問は、ナショナリズムと愛国主義にはどのような区別があるのか。先生も中国が愛国主義を提唱していることに言及されていましたが、同時に、中国で現実的に現れているナショナリズムをいくつか挙げられていました。では、この愛国主義とナショナリズムにおいて、国家が提唱する愛国主義と民間に表れるナショナリズムの間の矛盾とは何であるかということです。よろしくお願いします。

●—ヒューズ コメントありがとうございます。ヨーロッパでナショナリズムよりも前にグローバリゼーションの考えがあった、例えば新世界の発見などというあなたの議論は正しいと思います。多くの歴史家がそう議論しているのは正しいと思います。私はそれを支持します。我々が中国をみるときの問題の一つは、政策決定を留意しながらみているということ、ナショナリズムやグローバリゼーションをみる多くのやり方は政策サイドからきているということです。そこでは中国を変容させるアジェンダがあり、グローバリゼーションは特にアメリカの見方から中国を変容させるために使われていることは極めて明瞭です。

歴史的にみると、グローバリゼーションはイエス・キリストから始まったということも正しい

し、どこまでも遡ることができます。その意味ではグローバリゼーションは非常に範囲が広くなり、もはや使うことができない概念になります。なぜなら、それは世界歴史を意味しているからです。そこで我々はより狭い定義を必要とします。政策決定政治によって左右されないもの、それほど大きくはなくて世界歴史の一部となるものです。それをやるやり方は、これらのグローバルなプロセスが政治的論議の中心になる時期を、康有為のような人々が考えている時期をみることで、勿論中国は世界の50カ国の一つであるという彼の言説は、それ自身はグローバリゼーションではなくて、一種のグローバルな自覚であり、一種のナショナリズムです。より重要なのは、通信や技術発展の文脈でそれが進んでいることを理解している仕方です。そしてそれらのグローバルのプロセスや取引を政治的正統性の中心問題と直接リンクさせている誰かをみることです。それが一種のグローバリゼーションの政治学です。それをコロンブスの時代にヨーロッパで見つけることはできないと思います。多分私は間違っているかもしれませんが、ヨーロッパのナショナリズムはグローバルなプロセスの発展したものであると議論することはできます。しかしそれがヨーロッパで理解されているものではないのです。それがフランス革命でどう理解されているかだとは思いません。フランス革命は、本質的にはフランスにおける階級闘争、フランス貴族制度の衰退によってもたらされた危機であります。そのときの誰もが、フランス革命が取引や、国際的取引のプロセスによって引き起こされたものとは話していなかったと思います。それは国内的問題によってもたらされた国内政治の正統性の問題でありました。だからこそ、ナショナリズムとナショナリズムの発展についてフランス革命を起点としてみたがる傾向があるわけです。それは中国で起こったこととは全く異なるものです。勿論清朝自体が分裂しており、それは事実であるのは明瞭ですが、先の質問

が指摘したように、アヘン戦争、これら外国の考えのインパクトがフランス革命にみられない役割を果たしました。フランス革命家はルソーを当てにしていました。彼らは孔子を当てにしていなかったのです。儒教を当てにしていたのはルイ14世であり、フランス革命家ではなかったのです。彼らはある種のナショナリズムを打ち立てるために自らの政治的伝統に頼っていたのに対し、中国人は全く異なることをしなければならなかったのです。そこには非常に重要な差異があります。

すべての国はナショナリズムを必要としているとあなたは指摘しました。民族のアイディアなしに国民国家をもちえないというのは正しいと思います。しかしどのくらいのナショナリズムか、どのような種類のナショナリズムかが重要な問題です。私の出身は国名にandを持つ世界で唯一の国、グレート・ブリテンと北アイルランドからなる英国は、多くの異なる民族から構成されており、それぞれが独自の政治システムを有しています。彼らが英国を離脱したいと欲すれば、彼らが出て行くことに我々はこだわりません。勿論アイルランド問題は別でしたが、スコットランドへの権限委譲、ウェールズへの権限委譲には、政治構造の発展、地方の代表権がみられます。これらの地域で英国の一部になりたくないとの強い運動があれば、それは政治的対話と政治のプロセスの一部にならなければならないことを私は実際受け入れたいと思います。我々の政治ではこのような議論を行っていますが、中国ではそのようなやり方で国家的アイデンティティーの問題を議論することは常に不可能です。その理由としては、英国の政治的エリートにとっては、ナショナリズムの問題はそれほど重要ではなく、より重要なのは民主的正統性を有していることであると思います。だから我々はヨーロッパの一部になること、主権を失うことを議論しています。ヨーロッパから抜け出したいと欲している英国独立党があります。ナショナリズムは重要ではありますが、政治エリートの

正統性にとっては鍵ではないので、これらの問題が公然と議論されているわけです。勿論中国では愛国主義(aiguozhuyi)についての議論は多くありますが、愛国主義の内容の多くは民族のアイデンティティーを正統性に結びつけるという意味で愛国的であります。私が意味している愛国主義は国民の国への忠誠を意味しています。しかし愛国主義が中国で教えられているやり方はもう一步進んだものであり、ナショナリズムを最高の価値としており、さらにこれらの愛国主義と国家の象徴、国家統一、統一達成への忠誠を何物にも代えがたい最高の目標としていることです。鄧小平は統一の国家目標の重要性とそれが憲法に盛り込まれていることを確認しています。それは教育制度で教えられています。それはヨーロッパや英国でのナショナリズムとは全く異なるものです。そこではスコットランドの独立、ウェールズの独立が議論され、彼等自身の議会、政党があり、ヨーロッパの一部になる欧州連合を議論しています。人々は興奮し、路上にも出るが、最後にはあまり気にかけないのです。それは民主主義による政治制度の正統性があるからです。民主主義に関する議論がここに入ってくるわけです。

●一司会者 それでは次は前席から、質問を受け付けますけれども、ちょっと時間が迫っていますので、質問を一問だけにしてください、一問だけ。はい、国分さん挙げられました？ 一問だけお願いします。

●一国分良成 一問ということですが二つありますので、短く二つ。一点目は中国のナショナリズムということですが、西洋の概念と日本の概念とは実は非常に複雑に違うところがあると思います。中国では「民族主義」という言葉は、実はあまり使われていないというふうに私は思います。なぜかという、孫文の時代は使われました。それは中国革命であるからです。しかし建国以後は国家設定、ネーション・ビルディングの過程で、大漢民族主義つまり漢族という一つの民族

が独占することに対するネガティブな感覚から、民族主義という言葉は非常にネガティブな意味を国内的に持つようになったわけです。ですから数の上で民族主義という言葉は実際あまり使われていないわけで、 globalization の代わりに使うとすれば、やはり愛国主義という言葉をもし探せばですね、1995年、96年は何百回、多分千回くらい、もっと使われているかもしれません。ですから言葉として民族主義という言葉が適当かどうか、つまりナショナリズムということが、今でもやはり必ずしも西洋的な意味のナショナリズムではないというところの議論、先ほどの愛国主義、パトリオティズム (patriotism) ですね。それから二点目。19世紀と現在、どちらがもっと衝撃があるかという問題ですけれども、この比較はなかなかできないと思うのですが、ただ、19世紀は中体西用、体用 (ti yong) 体 (ti) を、これを大事にして、結局ウェスタン・インパクト、西洋の衝撃を否定したわけです。しかし現在中国は WTO の加盟などにみられるように、これは一つの革命だと思うのです。つまり外にある市場経済、世界の市場経済のメカニズムを国内に導入すると、つまり体 (ti) の部分、中体西用の体の部分まで変えるという決心をしたわけですから、つまり現在の方が国内のシステムを国際システムに合わせるわけですから、19世紀と現在を比較した場合どちらがより大きなインパクトを持つかというのは、私は今の方が大きい可能性がある、ただこれからの反応がひょっとすると19世紀的になる可能性はあると思います。ただ、今の方向ではもっと大きな変化が起こる可能性があると思います。以上です。

●一ヒューズ ありがとうございます。質問は大変有益で、大いに考えさせられました。公式の政策はナショナリズムを使わないとの主張はその通りです。事実もう一步進めて、公式の政策を狭義のナショナリズムと広義のナショナリズムに分け、分離主義や民族的政治でない正しい方法で定義されるナショナリズムを受け入れることはでき

ます。ご承知のように、漢中心のナショナリズムは指導部によって否定的に受け止められており、そこから距離を置こうとしています。だから、ナショナリズムの代わりに愛国主義について語っているわけです。しかしながら、それは正統性、公的な立場であり、私が議論したいのはまず統計が示すように、我々が議論した1990年代にはナショナリズムが最も多く語られているわけです。そして指導部が愛国主義について語ったやり方は、ある種の漢中心文化を意味しているように思われるのです。これは1990年代初頭に遡ることができ、中国の指導部は、古い儒教の儀式を行い始め、最初の皇帝である秦始皇帝 (Qin Shihuangdi) の墓に参ったり、国家主導による中国のルネッサンス、文化復興を始めます。そのため文化が何であるかの考えを持つことが必要になり、その文化が漢の過去のある種標準的なものになっています。愛国主義はナショナリズムとは呼べませんが、その内容は実際非常にナショナリスチックなものであります。この点については中国の少数民族に聞きますと、彼等の反応からその通りだとわかると思います。あなたは皮肉にも、彼らがナショナリズムではなく、愛国主義についてのみ語っている理由は彼らがナショナリストであり、そのことを明確にしたがらないといっています。愛国主義を使うほうが安全であり、しばし使われています。しかしその内容をみると、外国の影響からの保護として使われ、特に愛国教育が若い人々を外国の影響から保護するために1990年代にみられました。だからそれは、国家を保護するある種の忠誠とは異なると思います。

さて、19世紀体用と今日を比較すると、体用二分法は外国のインパクトについてノーという保守的な方法であるとのあなたの指摘には同意しかねます。これは非常に重要な点です。私は張之洞の勸学を読んだときに初めて理解したわけです。それまで二次資料を多く読んでいましたし、多くの人が語るのを聞いてきました。しかし原典を読

んでおらず、ついに読んだわけです。張之洞は外部世界に対してノーといっているわけではなく、彼が見出したのはイエスという方式であったわけです。彼は現行のシステム、清朝システムを支持する者として、外国の技術の導入を認め、清朝システムを維持する方法を見出したのです。張之洞自身最も積極的な改革者の一人であり、外国技術を生産に導入したり、新しい工場を建設したりするのに積極的な人でした。彼がいわんとしたところを理解するためには原典にまで戻る価値があります。彼がいっているのは、保守主義であることは十分ではなく、我々が今外国の学問を許容する必要があることを受け入れなければならないということです。儒教のアイデンティティを維持しながら、そうする方法を彼が見出したのです。それが彼のポイントです。彼は外国の影響に対してノーといっているわけではなく、イエスといっているのです。

実際、彼らは彼の書物を出版し、全国に配布しました。勿論複雑な論争が起りましたが、他の改革者が中国を離れたり、処刑されたりしたときに、張之洞は職を解かれることはなかったのです。職務を続行できたのはなぜでしょうか。多分皇帝やそのアドバイザーが、この方式が機能すると考えたからです。時にはそれを拒んだり、受け入れたりしましたが、彼らはその方式が順応的か反動的かの方法を見出そうとしていたわけです。張之洞はその妥協を見出した人物であったわけです。彼が勸学でいっていることは、両者を拒絶しなければならない、すなわち、伝統的なものすべてを取り除こうとする改革者を受け入れることはできない、過去のすべてを維持しようとする保守主義者を受け入れることはできない、我々はこれを避ける何かを見出さなければならない、ということです。ここで策略をめぐらした重要なことは、官僚、政治的エリート、皇帝はこれが儒教であり、人々は彼等にまだ忠誠であると装うことができる様式を許容することであったと思います。同時に、

張之洞と同様の考えを持つ人々は工場や武器工場を導入し、列強との同盟を構築する新しい外国政策、外交に従事していたわけです。

このことについてはもっと調査し、議論し、清王朝の保守派の何人かについては再考する必要があること、彼らが実際主張したことをもう一度みることが、価値あることと思います。なぜなら、彼らに対する我々の見方の多くはより最近の出来事によって形成され、特に中国においては彼らは非常に心が狭く、反動的だとみられる傾向があるからです。しかし彼らが初期の中華人民共和国や教育制度に与えた影響をみますと、その多くが張之洞の業績から取られているのです。張之洞が推進した多くのことが中華人民共和国の下で生き残り、構築され、近代国家の土台のようなものになったのです。私はそれについてもっと知る必要がありますし、もし現代を理解しようとするれば我々すべてがその時代を理解する必要があると思います。

●—司会者 それでは時間になったのですが、若干延長します。何人かの方から質問を同時に受け付けて、まとめて最後に先生の方から答えてもらいたいと思います。質問は簡潔に一問だけお願いします。まず後部座席の方で。簡潔をお願いします。

●—質問者 では、一問ということだけなので一つだけに絞って、ナショナリズムについて。ナショナリズムという概念はヨーロッパから入ったけれども中国のナショナリズムはその中で、中国に入ってからナショナル・ヒュミリエーション (national humiliation) というものがつけ加わったと、これはヨーロッパのナショナリズムにはなかったものだったということですが、ドイツとフランスのナショナリズムにしても、イングランド、スコットランドの間のものにしても、そういう感情というものはナショナリズムの核、ほとんど核心のようなものであって、それのないナショナリズムというものはそういう感情のないナショナリ

リズムというのは想像がつかないのですけれども、そこのところちょっと先生のお考えをお尋ねしたいと思います。

●—**司会者** それでは前席のほうでご質問のある方、ちょっと加々美さん以外の方で、あの前席の方。それでは一問だけ。

●—**質問者** この愛国主義の問題について、よくわかりませんでした。お聞きしたいのは、アメリカのブッシュは常に、私はアメリカの国民の利益を代表していると言いますが、これは愛国主義でしょうか？

●—**司会者** それではそちらの女性の方、さっき手を挙げられておりました、簡潔に一問だけお願いします。

●—**質問者** ヒューズ博士ありがとうございます。一つ質問します。私は中国人ですので、あなたの見解に賛成できません。中国のナショナリズムがグローバリゼーションへの反応だとは思いません。中国のグローバリゼーションは約100年と短く、中国のナショナリズムは5000年以上の長い歴史があります。私は中国人で、中国で教育を受け、20年以上教育を受けています。私は政治的理由からではなく、人民の立場から考えます。ナショナリズムは国民の再編、国民の誇りだと思うのですが、私の考えに賛成しますか。

●—**司会者** それでは最後にもう一人、そちらのほうでどうぞ。後部座席の。はい、これで質問の受付を終わります。

●—**質問者** 私は年老いた一市民です。政治から経済的発達段階が地球規模の段階とその国の段階はいろいろあると思います。そういうものからそういう事を考える時に、中国のナショナリズムはこれからどこへいくと先生はお考えでしょうか。

●—**司会者** それでは、ヒューズさんお願いします。

●—**ヒューズ** 質問ありがとうございます。それでは答えさせていただきます。最初の質問ははっきりとは把握できませんでしたが、ナショナ

リズムの中核に国恥がなければ、ナショナリズムとはどういうものか、国恥なきナショナリズムはあるのかという質問だと受け止めました。しかしそれはありうると思います。フランスのナショナリズムは国恥からきたとは思いません。フランスのナショナリズムは外国人の影響に反発する国恥からきたものではなく、国内の政治的崩壊からきたものであり、国民の手に政治的権力をおく新しい政治的正統性を捜し求めたものです。それが鍵となるものであり、フランス革命が樹立したのは主権が国民にあるという枢要な政治的原則です。ここで国民とは人民を指し、エリートではありません。だから国恥である必要はありません。植民地主義後のナショナリズムに見出すところのものです。アジアや世界において帝国主義に苦しみ、その経験からでてきたものとは非常に異なるものです。私は、大英帝国のナショナリズムあるいはイギリスのナショナリズムが国恥からきたとは思いません。それは国家の勝利、帝国主義的偉業からきたのであって、国恥からではありません。それは実際横柄さからきております。歴史的経験によって異なるわけですが、国恥は中国のナショナリズムにおいてははるかに中心的なものであると思っております。

第二の質問はアメリカのナショナリズムに関するものでした。それは私の話の中心的なものでなく、私はアメリカの専門家ではありません。しかし私がいいたいのは、先の質問に戻りますと、ナショナリズムは民主主義体制では異なる何ものかということです。あなたがいかにナショナリティックである必要があると、正統性の問題に戻ります。アメリカにおける現在の大統領選挙は非常に興味深いものがあります。勿論愛国主義、ナショナリズムは重要な問題ですが、実際二人の候補者が多くは口にできない非常に難しい問題であります。なぜなら、もし彼らがナショナリズムを多く使用すれば、票を失うかもしれない限界や危険を知っているからです。特に外交政策が低下

しているときに、事実ブッシュ大統領のナショナリズムはいまや彼の弱点になっています。ケリー陣営では、「あなたのナショナリズムが我々を導いた先をみてみる」、「それは我々を悲惨な状況に追いやっている」といっています。なぜ我々はこれを必要としているのか。我々が必要としているのは、国連を通じての同盟、国際的支援・事業を構築することであり、この種の横柄な新帝国主義、ジョージ・ブッシュのナショナリズムではありません。民主主義制度ではナショナリズムの使用に実際制限が課せられていると思います。なぜならナショナリズムが政治的資源として多くは利用できないからです。事実、ナショナリズムを政治的資源として利用する必要がないのです。なぜなら、選挙において人々は多くの他の問題をみており、それらの問題がより重要であり、ナショナリズムは中国でいわれるように両刃の剣であるからです。民主政治ではナショナリズムを使うと危険になるのです。事実それは、民主政治が政治的エリートによるナショナリズムの使用を制限している顕著なものの一つです。世界でこれを見ることが出来ます。インドネシアの大統領選挙は興味深いものがあります。過去の権威主義体制ではナショナリズムが使われた国ですが、現在民主主義となり、それを使っていませんし、大統領選挙では争点とはならなかったわけです。多くの民族問題と緊張、非常に悲劇的歴史を有するインドネシアのような大きく複雑な国において、人々がそのような政治に投票しない選挙を持ったことはまったくの奇跡であります。このことは私を楽観的にさせますし、インドネシアについて楽観的になります。私は選挙前はインドネシアについて非常に悲観的でした。私は自分が間違っていたことを喜んでおります。それはインドネシアの偉大な業績です。

次に中国のナショナリズムは5000年にまで遡るという問題です。あなたの指摘は正しいと思います。ある種のアイデンティティーの問題ですが、漢王朝は5000年にまで遡り、詩や文学にこれを

みることが出来ます。しかしそれはナショナリズムと同じでしょうか。私がナショナリズムというもの、だから孫文を引用したわけですが、1924年の孫文は何か異なることをやっていたわけです。彼はこのアイデンティティーを一種の権力、一種の力として利用したわけです。それがナショナリズムであり、アイデンティティーではありません。すなわち、アイデンティティーを政治化し、エリートのための資源、一種の権力としたのです。勿論、漢人と野蛮人の差異について語る詩を見出すことは出来ます。競合する国がひしめく世界でエリートの正統性と国民のアイデンティティーの創出を直接リンクすることができるとは思いません。私の先の定義に戻りますと、ナショナリズムは国際的な側面を有しており、競合する国家からなる世界で考察されなければなりません。中国の概念は異なっており、一種類の文明、一種類の正統な統治者、中国の統治者のみが存在するという点で序列的なものであります。これは二つのものに基づくナショナリズムとは非常に異なるものです。一つは、国民の意思を正統性におく国内政治、正統性が天から来たものだとする中国の政治思想にはそれがあるとは思いません。もう一つの側面は国際面、すなわち、主権国民国家からなる世界で、これも中国の伝統にはありません。私が論じようとしたことは、19世紀のナショナリストやグローバリストはある種の中国ナショナリズムを発展させるために中国の伝統の要素を使用することができたということです。しかしそれはまだ異なったものであり、中国では近代的な考え方です。あなたのように論じる多くの人がいることを私は知っております。中国のアイデンティティーの古い伝統的考えがある種のナショナリズムであるかないか（私はそう思いませんが）は調査を続行する必要があります。

最後の質問ですが、はっきりとは理解できませんでした。中国のナショナリズムとその経済的インパクト、どんな経済的インパクトがあるかとい

うことだったと思います。それについてはあまり確信がもてません。ナショナリズムは経済的危機、勿論国際的危機の文脈の中で創出されたとは私は論じました。あなたの質問は、将来他に危機があったらどうなるのか、中国に経済危機が起こったらどうなるのか、金融制度が崩壊したらどうなるのか、があなたの質問だったと思います。それらは人々が話している内容であり、通貨の切り上げがあったらどうなるのか、それがあある種の経済構造問題を生み出し、失業を創出するというものです。もちろん日本でも1980年代以降にみられたものであります。私の議論、これはまさに鄧小平の議論でもありますが、一つは経済発展と改善する生活水準であり、もう一つはナショナリズムです。もし鄧小平が正しければ、それは正しかったわけですが、経済問題や経済危機は指導者をして自らを正統化するためにナショナリズムを多く使用することになるだとういうもので、それこそが力学だと思います。中国が経済危機を持たないことを我々は希望するものですが、私は危機があるとは予測しません。中国の経済状況は以前よりも良いと思います。我々が知っている諸問題にもかかわらず、中国は大きな経済であり、問題を抱えています。それは四つか五つの多くの異なるエンジンを有するロケットのようなものであり、一つのエンジンが壊れ、動かなくなれば、動かすために他のエンジンが使えます。それが国の大きさと経

済規模の優位性であり、中国の指導者はそれを利用できます。私が指摘したように、現在の指導部は経済成長に基づく正統性を発展させ、政治的代表の拡大やある種の民主化の方向に前進させようとしていると思っています。それはもちろん我々が望む方向です。現実の経済危機があるときには、世界に何が起るかを誰も知りません。それが起こらないことを我々は望みますし、中国で起こらなければならない理由がわかりません。私は楽観的ですが、状況を安定化させるためにすべての方面で議論すべき問題はあると思っています。それは我々が学者だからであり、それをすることができ、公開の意見交換を持つことができるわけです。だからこそ一同に会したこのような会議が歓迎されるわけです。我々がこのことをなし続け、このような方法でお互いの理解を高めることを心から望むものであります。

●—司会者 ヒューズ先生、どうも貴重なご講演ありがとうございました。またフロアーからの活発な質問に丁寧に答えていただきありがとうございました。非常に有意義なセッションを持つことが出来たと思います。ここで休憩致します。午後のセッションは一時から開始いたします。それでは最後にヒューズさんに盛大な拍手をお願いします。

(英語：山本一巳訳；中国語（3箇所）：磯部美里訳)